# 子どもの主体的学習

ある知的障害児の養護学校で講話の機会を得た。この学校は素晴らしい実践をしている養護学校である。例えば、課題学習の折り、子どもは時にあきて席を立つことがある。こうした時、殆どの教師は子どもを規制（席に着かせ）し、課題を続行しようとする。この学校の教師は、「子どもの示す行動全てには意味があり、そして全てに気持ちが込められている」との観点で教室を出る子どもに同行し、その子どものしたいこと（例えば、トランポリン）に寄り添いながら、そこでも行動の調整に係わり合っている。一区切り子どもはしたいことをし終えると、子ども自ら教師の手を引いて教室に入り自ら席に着き、課題学習を受ける構えを示す。

こうした係わり合いの中で、子どもの主体性を大事にし、ましてや課題学習も進むのである。言い換えれば、学習を受け入れようとする子どもの構え（主体性）が出来ていないところで、学習を無理矢理進めて形だけ学習場面を作っても、子ども自身の行動のエネルギーとはなり得ないと思う。これは、教育活動において大切なことであり、学級崩壊や勉強嫌いへの真の対応策へのヒントにすらなる実践と私は思っている。

こうした実践を学校全体で取り組んでいる教師の方々に、今更、私は何をか語らんである。まあ、折角の機会なので、こうした先生方個人個人へ、その実践への自信と誇りを更に強く抱いてくださるように、エールを送る話をさせていただいた。

以下は、ある先生からの感想のメール（抜粋）ですが、エールを受け取っていただいたようである。

「『生きる』ことの意味や『命の尊さ』についてですが、日々子どもたちから学んでいる（教えられている）ように思います。ですから、先生の講話はとても興味深く聴かせていただきました。

子どもとそのまわりを取り巻く人たちと真っ正面から真剣に向き合っていくことは、つらく逃げ出したくなるときもありますが、かかわり合いから得られるものを大切にしながら努力を怠らずに生きていきたいと思います。

先生の講話に勇気づけられました。感謝の気持ちでいっぱいです。」

（2003 年 02 月 08 日　記）